

## 第45回札幌くらぶサロン 春の豊平館でチェロの豊かな表現を堪能する

春うらら、中島公園の桜が開花した4月19日(日)、第45回「札幌くらぶサロン」が豊平館で開催された。今宵はサロンコンサートと交流パーティーの2部構成であった。

### 第一部サロンコンサート

札幌チェロ奏者の横山桂さんと小野木遼さんの演奏を聴いた。お二人は東京で活躍されていた時から仲で、客演したオ

ケで知り合い意気投合したそうである。入団した時期は異なるが、今や札幌チェロパートにとって無くてはならない存在である。タイプは違うが、とても仲の良いお二人である。

最初にバリエールの「2本のチェロのためのソナタ」が演奏された。フランス・バロックの楽曲で、2本のチェロの音色が豊かに溢れんばかりに拡がり、美しいハーモニーに魅了された。次に、バッハの「無伴奏チェロ

組曲第一番」が横山さん、小野木さんの順に演奏された。

横山さんの演奏はゆったりとしたプレリュードで始まった。続く舞曲は優雅に、そして歌っているかのように奏でられた。春の清々しさを感じさせる爽やかな演奏はとても心地よく、終曲のジグはそよ風に運ばれて行くように曲を閉じた。

一方、小野木さんのプレリュードは淡々とした出だしからしだいに躍動感が加わった。舞曲はクリアで生命感にあふれ、力強さを増して終曲のジグで大きなうねりに達した。最後の音を弾き切ると弓を高く上げ、ドラマチックに曲を閉じた。

お二人の演奏はどちらも個人的で、その違いをはっきりと感じることができた。演奏前に小野木さんがこの曲について「バッハの自筆譜が無いので、表現は奏者に委ねられており、演奏はそれぞれ異なることになる」と話されていた。

最後はピアノの「ル・グラン・タンゴ」である。ロストロポヴィチの依頼でチェロとピアノのために作曲された曲だが、チェロ2本にアレンジされた楽譜で演奏された。ピアノは小野木さんの十八番であるが、今回は第一チェロを横山さん、第二チェロ(超絶のピアノパート)を小野木さんが受持った。ピアノの打楽器的な響きとタンゴのリズムを2本のチェロで挑戦した。会場は情熱的な響きに満たされ、ブエノスアイレスへと誘われた。激しく交差する弓はあたかも男女が足を絡ませてタンゴを踊っているかのようにであった。中間部の第Ⅱタンゴは横山さんのチェロの優しく愁いを帯びた旋律と怪しい色気が圧巻で、それを小野木さんが見事に支え、ピアノ版を超えていた。信頼とリスペクトあつての熱演で豊平館の広間は喝采で沸いた。

アンコールに呼ばれてバッハの「G線上のアリア」が静かに演奏された。不意に、私は上田会長がいつもお座りになっていた席に視線が向き、その美しい旋律に感極まった。

演奏を終えてくつろいだ表情



横山桂さん(左)と小野木遼さん(右)  
定期演奏会の直後の疲れも見せず  
仲良しならではの息のあつた演奏を聴かせた



小野木さんと荒木専務理事を囲んで

会員／高木誠一

演奏を終えてくつろいだ表情

第2部  
交流パーティー

札幌専務理事の荒木太郎さんの乾杯で始まった。お花見をイメージした料理と、日本酒党の横山さんには生酒が振る舞われ、お花見気分を味わった。フルートの福島さんも加わり、楽員さんはそれぞれ分かれてテーブルに着き交流の輪となった。至福の時間は瞬く間に過ぎ、札幌くらぶ顧問の八木幸三先生のご挨拶と風変わりな手締め(指締め)で幕となった。

音楽の表現には多様性があり、また感じ方もそれぞれである。その魅力を堪能した春のひと時であった。

6月〜9月 定期演奏会・Martinシリーズ

# 演奏会を楽しく聴くために

八木 幸三（札幌くらぶ顧問）

尾高忠明



©Martin Richardson

第678回定期演奏会

6月27日（土） 17:00

28日（日） 13:00

指揮 尾高忠明  
ピアノ ホアキン・アチュカロ

の透明な分散和音、夜想曲の柔らかな弦楽のトレモロなど音色の選択が極めて絵画的だ。

哀愁漂うノルウェーの牧歌的情景を感じさせる第1曲「羊飼いの少年（牧歌）」にはじまり、民俗的で素朴な力強さがある第2曲「ノルウェーの農民行進曲」、夜の静けさと夢幻的な雰囲気漂わせる第3曲「夜想曲」と続き、第4曲「行進曲（トルルの行進）」は、ユーモラスで躍動的なフィナーレとなる。

## ■グリーグ

ピアノ協奏曲

抒情組曲

グリーグが生涯にわたって書き続けたピアノ曲集《抒情小曲集》は、全十集にわたる66曲からなっているが、その第五集から4曲が管弦楽化された。原曲は小品でありながら、半音階的な装飾や微妙な転調がほどこされ、甘く切ない和声の色彩といった特徴があり、これが管弦楽によりさらに際立つ。オーボエやフルートの牧歌的旋律、弦楽



ホアキン・アチュカロ

© Jean-Baptiste Millot

1867年にグリーグは、従妹のソプラノ歌手ニーナと結婚し女兒が生まれた後コペンハー

ゲン近郊の農村で長閑な環境のもとこの曲を作曲した。25歳の時で、幸福な私生活を反映して

か曲は深刺とした清新な楽想で、ノルウェーの郷土色が感じられる豊かな旋律や和声に彩られている。この曲は、ネウパルトのピアノ独奏により演奏され、初演から大成功をおさめた。元々ピアノの名手でもあったグリーグは、ピアノの機能を十分に生かしたこの曲を後にリストに見てもらっている。その時リストは、初見でこの曲を完璧に弾きこなし、「この調子で進んでいきたまえ！」とグリーグを賞賛したと言う。

## ■エルガー

抒情的なセレナード

大器晩成型のエルガーとしては、比較的初期の作品で彼が35歳頃に作曲された。まだ国際的名声を得る前であり、地方都市ウスターで教師や指揮、合唱の仕事をしたがら活動していた頃でもあった。しかし、のちに名声を確立する独特の英国ロマン主

義スタイルを確立しつつあり、「弦楽セレナード 本短調」や歌曲作品と並行して、抒情的な性格を持つ小品を多く生み出している。

この曲は高貴で気品ある旋律感を形成する過程の作品と言われ、当時の妻アリスとの幸福な生活や、牧歌的な英国の風景の感性が投影されている。長く伸びるレガートを基調とした旋律線が特徴的で、声楽曲が得意だったエルガーらしく、まるでアリアのような情感と自然な息づかいを感じる事ができる。

## ■エルガー

エニグマ変奏曲

『エニグマ変奏曲』という曲名は通称であり、正式名を『独創主題による変奏曲』という。出版に際して「エニグマ（謎）」を付記することをエルガーも認めた。エルガー自身の説明では2つの謎がある。一つ目は変奏曲に自分を含め友人たちの特徴がスケッチされていること。それが誰かは、副題のイニシヤルですぐに解き明かされた。はじめの変奏曲は、作曲者の妻アリスで、最後の変奏曲は自画像である。二つ目は、実際には演奏されないが、全曲を通して沈黙の伴奏の役割を果たしている別の主題が

隠されていること。この謎は今もって解明されていない。作曲のきっかけは、教職活動にあぐねたエルガーが、ピアノに向かつて物思いにふけていた時だった。即興的な旋律の一つが妻アリスの注意を惹き、「気に入っ

たのもう一度繰り返して弾いてほしい」と頼まれた。エルガーは妻を喜ばせるために、その主題に基づいて即興的に変奏を弾き始めたことだった。彼の愛妻ぶりが、この曲からもうかがわれる。

## Martinシリーズ

第26回定期演奏会

8月5日（水） 19:00

指揮 沖澤のどか  
ヴァイオリン 中野りな

## ■林光

吹き抜ける夏風の祭り

『吹き抜ける夏風の祭り』は、オーケストラで素描した祭りの幻想を音化した作品で、「過ぎ去った時代の亡霊や幻影もよみがえり、生きている人びとに交じって、祭りへ駆けつける」と林自身が語っている。劇伴音楽を多く手がけた作曲者の魅力が堪能できることだろう。

## ■シベリウス

ヴァイオリン協奏曲

若き日にヴァイオリニストを夢見ていたシベリウスは、この



沖澤のどか

© Felix Broede



中野りな

© kisekimichiko

楽器の扱いにも大変長けていた。優れた交響曲や交響詩を書いたシベリウスはこの曲においても従来の協奏曲とは比較にならないほど交響的色彩の強いものを書いたことは当然だが、独奏楽器の特性を十分に発揮させ、シベリウス以外の何者でもない独創性溢れる作品に仕上げている。特に第1楽章では、ソナタ形式の枠を超え、カデンツァを中央においた独特の構成で情緒の深さを幽玄に表現している。この曲は叙情的な旋律とラプンディーな曲想で、女性ヴァイオリニストに人気があるのか、筆者も神尾真由子などを始め多くの女性演奏家を聴いてきた。今回は、21歳の俊英中野りなど今、注目の女性指揮者沖澤のどかとの熱い競演が大いに楽しみたい。

■プロコフィエフ

「ロメオとジュリエット」

組曲より

不滅の名作「ロメオとジュリエット」は、これまでに何度も映画化され、また「ウェストサイド物語」のように、これを原作に新たな形で作られている作品もある。音楽ではベルリオーズの劇的交響曲やチャイコフスキーの幻想序曲も有名だが、グノーも

オペラを残している。しかし、近年ではCMやフィギュアスケートなどでよく聞くプロコフィエフのバレエ音楽が、あの特徴的な旋律ですっかり馴染みになってしまった。今回は沖澤セレクシオンとして、どんな新鮮な「ロメオとジュリエット」が聴けるのか興味津々だ。

Titaniシリーズ

第27回定期演奏会

9月2日(水) 19:00

指揮 エリアス・グランディ  
オーボエ 関美矢子

■吉松隆

朱鷺によせる哀歌

朱鷺は20世紀末に絶滅の危機に瀕し、日本産最後の朱鷺が



エリアス・グランディ

© Yasuo Fujii

関美矢子

2003年に死去するという深刻な状況だった。吉松隆は自然界への深い共感をたびたび作品に込めており、この作品は朱鷺への追悼と祈りをテーマとしたもので、彼の「自然礼讃・生命への回帰」という作曲思想から生まれた代表作だ。繊細で哀しみに満ちた旋律が特徴で、心の奥に届く静謐な美しさが弦楽器やピアノによる幻想的な響きで、まるで日本画のように描かれていく。

■R・シユトラウス

オーボエ協奏曲

R・シユトラウスは晩年、第2次大戦終了後ドイツ南部の山荘でひっそりと暮らしていた。そこへアメリカ軍兵士の一団が訪問し、その中にいたピッツバーク交響楽団の首席オーボエ奏者ジョン・デ・ランシーが作曲家にオーボエ協奏曲の作曲を勧めた。シユトラウスは、当初作曲を渋っていたがスイスのバーデンに滞在したのを契機に作曲をおこない古典的ながら明澄な美が調和した名作を生み出した。札幌首席オーボエ奏者関美矢子の豊穣な音色がホールに放たれる瞬間が待ち遠しい。

■ドヴォルジャーク

交響曲第9番

「新世界より」

「ご存じ」新世界より」は、ドヴォルジャークが音楽院院長に就任するためアメリカに渡り作曲されたものだ。素朴なインディアンの民謡や黒人霊歌に強い影響を受け作曲されたが、決して

アメリカそのものを描写したものではない。彼は、新天地のアメリカに渡ったことで、あらためてボヘミアの精神と故国への郷愁が盛り込まれた新しい音楽を書こうとしたのだ。誰もが口ずさめる「新世界より」の第2楽章は、ドヴォルジャークの代名詞的旋律で後に彼の弟子が「家路」という題名で歌曲にしている。

■ブルックナー

交響曲第4番

「ロマンティック」

ブルックナー全11曲の交響曲の中でも「ロマンティック」は最も多く演奏されている名作だ。この作品は作曲家にとって初めての長調の交響曲である。変ホ長調という調は、とても人間的な温かみのある音の世界を創り出し、全調性の中でも明朗闊達と言って良い。そのためか、この曲を聴くと幸福感、さらには勝利の雄叫びのような高揚感を随所に感じさせてくれる。そんな調性を用いながらブルックナーらしい特徴が冒頭から満載だ。



2024年1月札幌交響楽団 第658回定期演奏会より

か19歳の時に作曲した作品で、すでに歌曲では「野ばら」や「魔王」など名曲を生み出していた。交響曲分野においては、自身の交響曲の途中段階で、ベートーヴェンの影響から徐々に距離を置き、モーツァルトへの深い傾倒が反映されている。楽器編成も小さく、アマチュア音楽会で演奏することが目的だった。

まず、得意の「ブルックナー開始」で曲は始まり、弦楽部の最弱奏のトレモロからホルンが主題を浪々と奏でる。そして、2つの音と3連符からなる「ブルックナー・リズム」をさまざま繰り返り出して、総奏によるユニゾンでのブルックナーの宇宙観をパーメルトは、どう描いてくれるだろうか。

■シューベルト

交響曲第5番

第679回定期演奏会  
9月12日(土) 17:00  
13日(日) 13:00  
指揮 マティアス・パーメルト

作品は古典派の気品・均整美と、ロマン派的な旋律美が見事に融合している。第1楽章はモーツァルト風の均整と、柔らかい旋律線が調和し、第2楽章は歌曲的な美しさを持っている。短調による力強くロマン的な第3楽章に続き、運動性と軽妙な対話、終止感が明るく爽快な終楽章へと進む。

(写真提供 札幌交響楽団)

この曲はシューベルトがわず

たつだ かなみ  
ヴァイオリン奏者 龍田香菜美さんに聞く

## 心をつかむ音楽家をめざしたい



### プロフィール

大阪出身。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、東京藝術大学音楽学部器楽科を同声会賞を受賞して卒業。全日本ジュニアクラシック音楽コンクール、日本奏楽コンクール等で第1位。他にも全日本学生音楽コンクール大阪大会第3位等多数受賞。これまでに小栗まち絵氏、漆原朝子氏、植村太郎氏に師事。6ヶ月の試用期間を経て、2025年10月1日入団。

### 暗譜が飛んだ!

出身は大阪市阿倍野区です。近くには「あべのハルカス」、少し歩けば四天王寺や天王寺動物園などがあります。中学までは地元の学校に通いました。

ヴァイオリンを始めたのは4歳の時です。母はヴァイオリンを教えていて、姉も当時は母に習っていました。私は姉が大好きだったので姉の真似をしたいと思って習い始めたようです。実はそのころの記憶はほとんどないのですが…。

小学校4年生の時に母の教室をやめて新しい先生のレッスンに通うようになりました。教室は家からは電車で1時間くらいかかる豊中でした。そのころ、母の音大時代の友達のお子さんたちがいるようなコンクールに出ていました。私も何度か聴きに行きましたが、お兄ちゃんやお姉ちゃんたちが全日本音楽コンクールなどにも出場

し、皆さんとても上手で、「かっこいいなあ、自分もこんなふうになりたいなあ」と思うようになりました。それがきっかけで本格的にヴァイオリンに取り組みようになり、そのころからコンクールに出るようになりました。結果は全然ダメでしたけど。

一度だけ大変な経験があります。小学校6年生の時に、コンクールの演奏中に暗譜が飛んでしまい、頭が真っ白になったことがありました。伴奏のピアノが途切れずにつながっていきくれたので、私も何とか元に戻れました。今も緊張することもあります。緊張した方がかえって演奏に集中できるのではないかなと思っています。

### 獣医さんか？スケーターか？

そのころはヴァイオリンのほかにもしてみたいことがいっぱいありました。

### 4歳の時 初めての発表会



あの大学に入ってみたくて、獣医さんになつてみたいなどいろんなことを考えていました。今も動物全般が大好きで、小学生の時には、ハムスターを飼っていたことがあります。なついてくれるし、手間もそんなにからなくて私が世話を担当していました。

フィギュアスケートを習ってみたくて、思ったこともあります。かっこいいなあと思って、夏休みにスケートの夏期講習みたいのがあったのでちょっと通ったことがあります。でも、ヴァイオリンのレッスンのためには手にけがなどをしたら大変だからどつちかにしなさいと言われてたのでスケートは諦めました。

### 東京にわくわく

進路について真剣に考えるようになったのは中学3年生の秋くらいにのぎりぎりに

なったころです。音楽の道について考えるようになり、音楽高校に行くならここに行きたいと憧れを持ち続けていた東京藝術大学附属高校を受けることにしました。

高校に受かり家を離れることになりましたが、父も母も行っておいでと快く送り出してくれました。実は、家を出て東京で一人暮らしをすることは夢の一つだったのですが、私はちょっとわくわくしていました。任んだところは寮ではなくて学生マンションのようなところです。高校の授業もレッスンも大変だったけれど、友達と遊びに行ったりもして、普通の女子高生のように青春して楽しく過ごしていました。

その後、東京藝術大学に進み、ヴァイオリンのレッスン、ソルフェージュ、室内楽、オーケストラなどの授業、そのほかに毎年コンクールも受けたりして、あつという間の4年間でした。そのころには「プロになる!」という気持ちを持っていました。

### 95%が初めての曲

卒業後にはオーケストラに入ることを目標にしました。札幌交響楽団がヴァイオリン奏者を募集していることを知り、チャレンジしてみようと思えました。札幌を聴いたことは無かったのですが、札幌の演奏やキタラのホルルの素晴らしさについては聞いていました。去年の1月に芸森でオーディションを受けました。

卒業後すぐ4月から札幌の試用期間に入り、10月に正式に入団しました。入団してからほぼ全ての曲が初めてで、一から譜読みです。大学のころは学生オーケストラで年に数回本番の度に、交響曲を弾いた



高校の室内楽コンサートで  
(左から2番目)

り、エキストラでプロオーケストラの公演に乗せていただいたりしたこともありましたが、札幌に入ってから新しいレパートリーの曲ばかりです。昨年6月の定期演奏会の「ドン・キホーテ」「ダフニスとクロエ」の時はもう泣きそうになりましたし、「春の祭典」もあれもこれも…。札幌で演奏する曲の95パーセントが初めてで、どんどん次の曲が出てきます。毎日楽譜を読み、練習して、周りの方たちに一生懸命ついていきながらようやく1年がたとうとしています。曲のレパートリーもこの間にずいぶんと増えました。

### 家族旅行で北海道へ

推しは、実は馬なんです。小さい時に父に競馬場に連れて行ってもらったことがあって、馬が好きになりました。馬の魅力は、頭も良く、かっこよくて、時には一生懸命走ってくれるところです。今は「メイショウタバル」という馬が気に入っています。もちろんぬいぐるみのストラップもちゃんと持っていて、ヴァイオリンのケースに下げています。

趣味と言えるかどうかわかりませんが、旅行が好きです。小さいときは家族旅行に行ったり、高校や大学でも友達といるところへ行ったりしました。北海道は小学校の時に家族で1週間くらい道内をまわり、札幌、知床、網走に行ったりしてすごく楽しかったのを覚えています。博多で美味しいものを食べた



卒業旅行のタイで  
高校大学7年間共にした親友と

これまで印象に残っている演奏会、指揮者の方といえば、12月、下野竜也さん指揮の「第九」がまず思い浮かびます。また、ホリガーさん、ボンマーさんとの共演も素晴らしかったです。

香川へ行ったり、高校の演奏研修旅行では、みんなでブダペストやウィーンにもいきました。それから海外旅行にも興味を持ち、イタリアのローマやフィレンツェ、他にはタイや台湾などにも行きました。これからはオーケストラの南の方

これからは演奏してみたいなと思うのはマーラーです。昨年の4月の定期「復活」は出演できなかったのですが、マーラーの交響曲はまだ1曲も演奏していません。どれも演奏の規模が大きいので大変だと思えますが、マーラーにはずっと憧れていました。今シーズン3番、4番と演奏できるのが楽しみです。苦手なのはバッハです。バッハのバルティータ、ソナタなどコンクールの課題曲になったりするのですが、何回弾いても苦手です。

### パールマンが大好き

好きな演奏家はパールマンです。パールマンにしかない味があり、音楽から見える色豊かな景色が小さい頃から大好きです。

これからはオーケストラの練習を一生懸命頑張りたい。ソロの練習も続けて、自分の技術も磨いていきたい。カルテットにもチャレンジしたいと思います。ヴァイオリニストとして一番の目標は、説得力のある、自分にしかできない、人の心をつかむ音楽家になることだと思っています。大好きなパールマンもそんな音楽家の一人です。私もそういう演奏家をめざしていきたいと思えます。

### 運営スタッフ活動報告

下半期(10月~3月)

- 10月9日(木)
  - 第43回札幌くらぶサロン 豊平館 50名参加
  - 第1部 サロンコンサート トランペット 小林昌平さん
  - ピアノ 城真由さん
  - 第2部 交流パーティー
  - 10月19日(日) 運営会議 15名出席
  - 10月20日(月) 茶話会「札幌くらぶカフェ」
  - 11月17日(月) 会報111号発行
  - 11月29日(土) 第15回日本プロオーケストラファンクラブ協議会(JOFC) 総会 札幌くらぶ3名参加
  - 11月30日(日) 札幌市内青少年 音楽活動団体招待活動
  - 12月15日(月) 運営会議 14名出席
  - 1月12日(月・祝) 第44回札幌くらぶサロン
  - 3月8日(日) 茶話会「札幌くらぶカフェ」
  - 3月16日(日) 運営会議 14名出席
- 第2部 ニューイヤー！
  - サロンコンサート ヴイオラ 原 香奈恵さん
  - ピアノ 城真由さん
  - 第3部 ニューイヤーパーティー
  - 2025年度楽譜支援金贈呈
  - 1月19日(土) 運営会議 15名出席
  - 1月31日(土) 札幌市内青少年 音楽活動団体招待活動
  - 札幌西高等学校A 17名
  - 2月1日(日) 札幌市内青少年 音楽活動団体招待活動
  - 南が丘中学校 20名
  - 茶話会「札幌くらぶカフェ」
  - 2月16日(月) 会報112号発行
  - 3月6日(金) 札幌市内青少年 音楽活動団体招待活動
  - 第65回定期演奏会の練習見学会
  - 手稲中学校 29名
  - 札幌東高等学校 16名
  - 茶話会「札幌くらぶカフェ」
  - 3月7日(土) 札幌市内青少年 音楽活動団体招待活動
  - 札幌西高等学校B 15名
  - 3月8日(日) 茶話会「札幌くらぶカフェ」
  - 3月16日(日) 運営会議 14名出席
- 第1部 札幌定期ブレイク
- 札幌くらぶ顧問 八木幸三さん

## 札幌の響きとともに

いつも札幌交響楽団を応援していただき、ありがとうございます。2月5日をもって32年間の札幌チェロ奏者としての楽員生活を終えました。

私が初めて札幌の演奏に触れたのは小学生の頃でした。母に連れられて当時の市民会館へ行き、山本直純さんの指揮する札幌を聴いたのが始まりです。会場に満ちた豊かな響きに心を奪われ、オーケストラという存在に強く憧れるようになりました。中学生になると北電ファミリーコンサートに毎月のように通い、高校生では定期会員となりました。あの頃に聴いた札幌の音色は、今も私の中に鮮明に

残っています。

東京で大学に通っていた昭和63年、初めてエキストラとして札幌の舞台に立つ機会をいただきました。緊張で胸がいっぱい

になりました。緊張で胸がいっぱいになりながらも、客席から見上げていた憧れの奏者の方々と同じ舞台で演奏できた喜びは、今も忘れられません。そして1993年、恩師である上原与四郎先生の定年退職で空いた席のオーディションを受け、幸運にも入団することができました。入団後は演奏活動に励む一方で、オーケストラの運営には多くの課題があることも知りました。私は労働組合の書記長、委員長を通算20年以上務め、経営的

に厳しい時期も経験しました。その都度、札幌くらぶをはじめとする多くのファンの皆さま、支援者の方々、そして上田文雄さんのように力強く支えてくださる方々のおかげで、札幌は歩みを止めることなく今日まで続いてきました。

地元札幌や北海道での演奏は

もちろん、一か月近くに及ぶ英国公演や欧州公演、東南アジア各国を巡る海外公演も、私にとつてかけがえのない経験です。また、インターネット黎明期に非公式ホームページを開設し、多くの方と交流できたことも、札幌の広がりを実感する出来事でした。

私にとつて札幌の音色は「透明でありながらも温かい」ものです。奏者は世代交代を重ねてきましたが、その響きの芯は確かに受け継がれています。街に根ざす常設オーケストラだからこそ生まれる、この連続性こそが大きな魅力でありロマンだと感じています。

これからは、レッスンや個人としての演奏活動も続けながら、外から札幌を応援していきたいと思っています。今後とも札幌交響楽団への変わらぬご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

荒木均



チェロ奏者 荒木 均さん

2026年2月5日退団

楽団長・事務局長 2026年4月30日退職

## 札幌 そしてファンの皆さま

### との思い出

札幌交響楽団での日々を振り返ると、真つ先に浮かんでくるのは「本当に楽しかった」というシンプルな思い出です。入団してから今日まで、数え切れないほどの素晴らしい経験をさせていただきました。

思い返せば、私個人の方だけで成し遂げられたことなんて、

本当にほんの少ししかありません。いつも周りには最高の音楽家であり、素晴らしい人間性を持った先輩や同僚たちがいて、事あるごとに助けられ、導いてもらいました。素晴らしい仲間におおききお返しは、私の音楽人生における最大の財産です。

そして、その充実した日々は、舞台を一緒に創り上げてくれた友人たちだけでなく、いつも温

かい拍手を送ってくださるお客様、ひいては札幌くらぶの皆様への支えがなければ、決して成り立たないものでした。

特に心に残っている大切な思い出のひとつが、札幌くらぶサロンコンサートです。皆様が企画から運営まで、本当に細かい

ところまで気を配ってサポートしてくださったおかげで、奏者である私はただひたすらに音楽に集中し、とても心地よく、気持ちよく演奏することができました。あの手作りの温かい空気感や、皆様との近い距離での交流は、オーケストラ奏者として活動する中で、他では得られないかけがえのない喜びでした。本当に感謝しています。

正直なところ、今でもすぐに



コントラバス奏者 下川 朗さん

2026年1月31日退団

札幌に帰りたいという気持ちでいっぱいです。札幌の街の空気、美味しいご飯、そして何より、札幌を愛し支えてくださる皆様の温かい笑顔や思い出すと、胸がぎゅゅと熱くなります。それくらい、私にとつて札幌と札幌は、心から愛する特別な場所になりました。

も自分らしく音楽と向き合い、精一杯頑張っているように思います。いつかまた、成長した姿で皆様にお会いできる日を夢見たいです。また帰ります。その時まで忘れないうちに思い出をたたくように嬉しんでいます。

下川 朗

## ありがとう 札幌

1986年10月、教育文化会館二階の札幌事務所で竹津事務局長と入団契約して以来、札幌一筋でオーケストラ人生を過ごしました。入団当時、プロオケを何も知らない若造は岩城音楽監督からは「新人類」と呼ばれ、先輩からは厳しく多くの大切な事を教えていただきました。あれから39年6ヶ月、必死に演奏しながらも様々な忘れられない思い出があります。グリーンコンサートや地方公演で北海道の各地を巡り、四季折々の素晴らしい自然や美味しい食べ物に感動し、今では全道各地への道順もナビ無しで運転出来る様になりました。また、二度の東南アジア

公演、英国、ヨーロッパ、韓国、台湾の海外公演は、忘れられない札幌での素晴らしい記憶となっています。

札幌破綻存続危機。地震災害、コロナ禍での演奏会中止は楽団員としての在り方を考え直す、辛く大切な時間でもありました。楽員同士がお互いを支え合いながら、指揮者尾高さん、事務局長宮澤さん、ピリッキ、札幌くらぶ、企業や定期会員。札幌を支援してくださった多くの方々には感謝の念に堪えません。演奏家が自分の仕事に専念出来る事の幸せを、これからの団員にも忘れない様お願いしたいと感じております。

札幌では意外にも触れる機会の少ない木管五重奏。その豊かな響きとアンサンブルの妙を存分に味わえる公演が、この夏開催されます。

私の所属する「クインテット樹（いつき）」は、ARDM（アンサンブル）国際音楽コンクールへの出場を目指して結成された木管五重奏団です。2024年の同コンクールでは新曲特別賞を受賞し、音楽的探究心と高いアンサンブル力が国内外で評価されました。それぞれが第一線で活躍する奏者でありながら、五人が一体となつて生み出す音楽には、室内楽ならではの緻密さと躍動感が息づいています。

団体名「樹（いつき）」は、発起人の一人である長田和樹の名前から一文字を取るとともに、木管五重奏という編成に由来しています。五つの「木」の楽器がそれぞれに根を張り、響きを重ねながら一つの音楽を育てていく。そんな思いが込められています。

そしてこの札幌公演は、「クインテット樹」のメンバーがかねてより実現を願ってきた舞台でもあり、私自身も札幌の皆さまにこの団体の魅力をぜひ紹介したいという思いを温めておりました。その思いが重なり、ようやくかたちとなった本公演。曲目はニールセンの木管五重奏曲をはじめ、イベールの《3つの小品》など、木管五重奏の魅力が詰まった名作を中心にプログラムを構成。親しみやすく色彩豊かな作品が並び、初めてこの編成に触れる方にも楽しんでいただける内容となっています。

会場は、札幌が誇る優れた音楽空間である「ふきのとうホール」。繊細なニュアンスからダイナミックな響きまで、木管五重奏の魅力余すことなく体感できる内容となっています。

2026年7月27日  
ふきのとうホールにて。

これまで約40年、札幌の音の一部分になった事は人生の喜びであります。これからは「元札幌団員」の名に恥じないよう精進してまいります。

心安らぐ爽やかで純粋な美しい響きを保つ札幌を今後ともよりしくお願い申し上げます。

佐藤 誠

### クインテット樹 札幌公演

#### 木管五重奏の魅力

から一つの音楽を育てていく。そんな思いが込められています。

そしてこの札幌公演は、「クインテット樹」のメンバーがかねてより実現を願ってきた舞台でもあり、私自身も札幌の皆さまにこの団体の魅力をぜひ紹介したいという思いを温めておりました。その思いが重なり、ようやくかたちとなった本公演。曲目はニールセンの木管五重奏曲をはじめ、イベールの《3つの小品》など、木管五重奏の魅力が詰まった名作を中心にプログラムを構成。親しみやすく色彩豊かな作品が並び、初めてこの編成に触れる方にも楽しんでいただける内容となっています。

会場は、札幌が誇る優れた音楽空間である「ふきのとうホール」。繊細なニュアンスからダイナミックな響きまで、木管五重奏の魅力余すことなく体感できる内容となっています。

2026年7月27日  
ふきのとうホールにて。

会場は、札幌が誇る優れた音楽空間である「ふきのとうホール」。繊細なニュアンスからダイナミックな響きまで、木管五重奏の魅力余すことなく体感できる内容となっています。

2026年7月27日  
ふきのとうホールにて。

会場は、札幌が誇る優れた音楽空間である「ふきのとうホール」。繊細なニュアンスからダイナミックな響きまで、木管五重奏の魅力余すことなく体感できる内容となっています。



Fl.清水伶(新日本フィルハーモニー交響楽団首席フルート奏者)  
Ob.浅原由香(札幌交響楽団副首席オーボエ奏者)  
Cl.亀居優斗(神奈川フィルハーモニー管弦楽団首席クラリネット奏者)  
Fg.長田和樹(ケルン・ギョルツェニヒ管弦楽団首席ファゴット奏者)  
Hr.信末碩才(日本フィルハーモニー交響楽団首席ホルン奏者)

### 演奏年鑑がウェブ配信されました

毎年、日本演奏連盟が刊行している「演奏年鑑」が今年度よりウェブ配信されることになりました。この年鑑の「音楽界展望(北海道地区)」は札幌くらす顧問の八木幸三さんが執筆されています。札幌をはじめ、道内のさまざまな音楽活動が紹介されています。是非一度開いてみてください。

<https://jfm.or.jp/yearbook/2026.html>

トランペット奏者 佐藤 誠さん



2026年3月31日退団

札幌交響楽団

副首席オーボエ奏者

浅原由香

# 現代オーケストラ技術の頂点

○前奏曲と「愛の死」

楽劇「トリスタンとイゾルデ」より

イゾルデより

(ワグナー)

ヘルルト・フォン・カラヤン指揮

ベルリン・フィルハーモニー

管弦楽団

(84年録音)



ドイツで生活していた一年間(87年〜88年)、田高の恩恵もあって、僕はオペラハウスに通う喜びを31回味わった(6度のウィーン国立歌劇場も含まれる)。歌劇場の建物そのもののおごそかさ、ロビーでのくつろぎの雰囲気などに加え、超一流から、それなりに名の通ったオペラハウスの公演水準は総じて高く、本場の伝統芸術を堪能することができた。しかし、しばらく足をほこぶうちに、僕はひとつのことが気になりました。歌劇

場専属オーケストラが創り出す音楽がなにか雑に思われたのである。ウィーンは別として、おしなべて出だしの部分、すなわち頭が揃わないのだ。彼らはそのようなことにそもそも無頓着なのか、日本のオーケストラに親しんできた僕はかなりの違和感を感じた。求めるものが異なるのであろうか、その印象はヨーロッパ滞在中変わることとはなかった。

帰国後、ワグナーの管弦楽曲を収録した一枚のCD(カラヤン指揮/ベルリンフィル)を何げなく聴いていて驚いた。例えば楽劇「トリスタンとイゾルデ」の前奏曲の第16小節トゥッチ(総奏開始部分、深いタメのあと、の頭出しが驚くほど完璧に揃っているではないか。それも低音弦が瞬間的に先行し、全楽器がそれを追いかける(かぶせる)という構造、それが随所に現れるが、何という効果だろう。ドイツでの実体験の印象が一瞬のうちに遠のいた。オーケストラの合奏技術がここまでこのぼりつめるとは、このコンピの芸に脱帽するしかなかった。

このCDの魅力はそれだけでない。ワグナー独特の官能の嵐・毒が沈殿することなく、爽やかに風通しよく聞く者の耳を通り抜けてゆくのである。嵐のあとの清涼感に清められるような感覚は我々の常識を超える、次元の異なるワグナー像であろう。

自らの美学に絶対の自信を持ち、ベルリン・フィルを鍛えに鍛え、永い時間をかけてフルトヴェングラー時代の澱を一扫して完成度の高い芸を構築したカラヤン、僕にはその結晶がこのディスクだとおもえてならない。すばらしい。と同時に、本場で彼のオペラに接する機会を持てなかつたことが悔やまれる。様々な価値観、方法論が交錯するヨーロッパの音楽芸術は奥行きが深い。まだまだ付き合いを続け、その神髄を味わいたいものである。

青木晃一さんのCDを聴きながら  
ピリッキーのテーブルの前に青木さんが立っている。「何をしているのかな?」と近づいたら、新しいCDが積んであった。青木さんと石田さんがCDを創ったんだ。

「ソナタと歌曲の風景」  
青木晃一×石田敏明デュオ  
早速買ってサインをしていた

秋の日の  
ヴィオラの  
ためのいきの...

この詩の後に上田敏の「佛蘭西の詩はユウゴオに絵画の色を帯び、ルコント・ドゥ・リイルに彫塑の形を具へ、ベルレエヌに

至りて音楽の声を傳へ、而して又更に陰影の匂なつかしきを捉えんとす」とある。ヴィオラのソナタを聴きながらこの詩を思い出すのは必然なのか? などと想念が広がる。CDに話を戻そう。

▼先日NHK・FMの名演奏ライブラリーにマックス・ボンマーがとりあげられた。「ボンマーさんだ! 懐かしいなあ」と聴いていたら、なんと札幌の2015・7・11定期のメンデルスゾーン「讃歌」がかかった。思わず聞きほれた。NHKで放送するのはほとんどヨーロッパの演奏家のものなのに、札幌の演奏を取り上げるなんて、さすがボンマーさん。札幌の演奏が素晴らしいこと、札幌ってこんなにうまかったんだ。札幌に住んでいる幸せをしみじみ感じる。(井上)

会員/村岡範男

愛の歌  
ブラームス  
ピアノとヴィオラのための  
ソナタ第2番 変ホ長調  
ブラームス

▼4月19日の「札幌くらぶサロン」にスタッフとして参加しました。桜が咲き始めた中島公園の豊平館はとても素敵で、2階広間でのチェロ2台によるコンサートはさらに素敵でした。その後の交流パーティーも、華やかなオーケストラと桜色のロゼワインでお花見気分を満喫。いつも協力くださる札幌専務理事には心より感謝いたします。初参加の方も演奏者も、音楽と食を通じて会場が笑顔でいっぱいになり、何よりも嬉しいひと時となりました! (上野)

## スタッフの声

会員/井上明子